

『万葉集古義』の前身

鴻 巢 隼 雄

(3) 『万葉啓蒙』文化十二、三年頃成立

二 『万葉集記聞』

(1) 『万葉集記聞』

その奥書に「文化十年癸酉秋日 深澄稿」とあって、明らかに万葉集巻一に関する深澄(初期の号)自筆の註釈書である。竹柏園の所蔵に属する。茶色紙表紙、縦八寸八分、横六寸四分の零本、標題は無界簽紙に「万葉集記聞」と楷書し、内題には「万葉集第一記聞之二」とある。少くとも二冊はあつた体裁であるが、今は一冊しか伝わらない。しかも雅澄はこの書を晩年まで座右に置いていたらしいが、嘉永二年(五十九才)の蔵書目録、同四年及び安政三年(六十六才)の「蔵書虫干覚」を見ると、「万葉集第一記聞 一冊」とあるので、もともと二冊あつたとは必ずしも考えられない。巻一の明日香清御原宮天皇代以下巻末まで、本文及び傍訓をあげ、釈を施して典書を附し、宮地仲枝の箋記を加えたほか、おびたしい頭書と書入れがある。

内容は今日の「古義」巻一の中巻及び下巻に亘る部分で、ごく僅か歌の除外、脱漏を見るが、殆んど全歌の註といつてよい。今「古

『万葉集古義』の前身

鹿持雅澄の『万葉集古義』はその名で呼ばれる前に、前身の註釈作業が進行していた事実がある。「古義」と名のつく作業の最も早いものは、高知県立図書館所蔵一本(高知乙本)に属する巻二上の最後の紙(百七丁)折目下方に

戊寅八月六日書写畢

と見える書入れで、戊寅は文政元年に当るが、この時の一聯の書写作業は、「古義」と名のつく稿本の成立にとって飛躍的な生長段階を劃したものと思う。

即ちこの書写は、雅澄の註釈作業が、「古義」という名で新しく脱皮をとげるのにすこぶる緊要な楷程であつた。というのも、これまでにその前身が幾度も作られている痕跡があるからである。現存する「古義」稿本及びその他の文献、記録の中に、前身と認められるものの徴証を求めると、門弟南部巖男の作業(通称『南部巖男校本万葉集』)以外に、凡そ次の三種がある。

- (1) 『万葉集記聞』(万葉集第一記聞之二)文化十年成立
 (2) 『万葉集巻々愚考』(仮称)文化十一年成立

義」の内容と比べてみると、まず「記聞」の巻一(三八)人麿作歌の解には「春部」を註して

春部の部は仮字にて、春方の意也。玉小琴に、春部の部は方の意と誰もおもふめれど、春にのみ云て夏部秋部冬部といふことなければ、方の意にはあらず、春榮の約めたる言也、といはれたるは、しひことなるべし。春にのみ方といひて、夏方秋方冬方などは云へざるは、たとへば夕を由布幣とはいへども、朝を朝幣とは云ず、往を往方とは云とも、今を今方とはいはぬ類、凡ていと多ければ、一はかりにはおして定めかたきをや。とし、更に一旦頭註の形で

又冬をば真冬とは云とも、真春、真夏、真秋とは云ぬなどをも考へ合すへし

を加え、再び本文を續けて、

但し八卷丁六に、打上佐保能河原之青柳者今者春部登成爾鶏類鴨とある春部は、春榮の意なるへしとおもふ人も有べけれども、かれは柳の芽の弱を春にいひかけしみにて、猶部の言まではあつからず。

と述べている。しかるに「古義」でも同じ事を註して、

○春部は、春方の意なり、部ノ字は用ひたれども清て唱ふべし、其ノ謂は上に委しくいへるがごとし、(本居氏ノ説に、春部の部は、方の意と誰もおもふめれど、春にのみいひて、夏部秋部冬部といふことなければ、方の意にはあらず、春榮を約めたる言なりと云るは、しひことなるべし、春にのみ方といひて、夏方秋方冬方など云ざるは、たとへば冬をば御冬とは云ども、御春、御夏、御秋とは云ず、又夕を由布幣とはいへども、朝を

朝幣とは云ず、往を往方とは云ども、今を今方とはいはぬ類、

凡ていと多ければ、一はかりにはおして定めかたきをや、但し八卷に打上佐保能河原之青柳者今者春部登成爾鶏類鴨とある春部は、春榮なるべしとおもふ人も有べけれども、かれは柴の芽の弱を、春にいひかけしみにて、猶部の言までにはあつからず、

とあり、両書殆んど記述の内容を等しくしているが、僅かに、「記聞」の頭註を「古義」で修正し、組み入れている跡がある。

従つて「記聞」は、何かの機縁、恐らくその書名から判断して、師の宮地仲枝の講義筆録の機会を利用し、巻一の中及び下にまず註解の筆を下したが、一旦それを止め、間もなく「古義」に一層近い、次の万葉集全註の作業(次に記す『愚考』『啓蒙』など)に切り換え、「記聞」からの脱皮、前進を計つたものと思ふ。「記聞」の成つた文化十年は、「万葉集古義」と銘打つ最も古い稿本、即ち高知乙本の折目の書入れにあらわれた文政元年(文化十五年)八月の書写作業よりも五年前である。

三 『万葉集卷々愚考』

(2) 『万葉集卷々愚考』

これは仮称である。かつて雅澄が文政四年に先立つ数年前から、年々書きついで、天保十二年迄、『雑誌』総計六十冊を残したが、それが今は零本となつて、飛鳥井玉衛旧蔵本の中に数部見えてゐる。右の『万葉集卷々愚考』は小関清明氏の指摘に従えば、『雑誌』の第二十二冊の中に記されている一聯の万葉註解の記事である。しかもこれは雅澄自身が戊の年、文化十一年に記した『甲戌雑志』

(現存せず)からそのまま転載したもので、内容は万葉集その他の歌集、古事記、六国史等の古典に関する記事及びそれらの諸註釈書からの抄録、ならびにそれに関して自説を提示した記録類とならんで記入されており、従つて断片的ながら、筆者の積極的な研究態度とその学説の進み方を知るにたる。この「雑志」第二十二冊の中に取められた雅澄の所説は、万葉集の殆んど全巻からの摘録であつて、その研究の幅が、前項の「記聞」の場合より一層拡大している。

今その所説を見ると、全体は二十二条を列記しているが、この記事が生れる背後には、恐らく万葉全巻に及ぶ、語釈中心のかなり進んだ註解草案がほぼ出来ていて、そこから特に難語難訓に関する自説だけを摘出したという事情があつたものを思う。(二十二条に含まれる巻次は、万葉集の全巻に亘つていて、うち巻二と巻十だけがそれぞれ二項である。)この記事の全体を『万葉集巻々愚考』と仮称するのは、記事末尾に

已上万葉集巻々愚考文化十一年甲戌美濃屋忠五郎ニ託シテ難波人関谷敬藏深ニ見セニ遣ス控ナリ

とあるによる。美濃屋忠五郎は雅澄の友人武藤平道のことである。はじめ今村楽、後に本居大平、藤井高尚に師事した。雅澄が平道に託した摘記内容は、恐らくその手を通じて鈴門の関谷敬藏に渡された筈である。雅澄二十四才の年であつた。

試みに二十二条の内容を「古義」と対照してみると、両者の関係が明らかになる。

(愚考)吾崗之於可美爾言而同二卷
十二下

言は乞字の写し誤也言乞いとよく以たり、十三卷十九天地之神乎曹吾乞云々、十五卷廿二あめつちの可未乎許比都々云々など

有その証也、又集中に神に乞祈てふ言多きをも併考給ふへし、日本のままにてはおだやかならぬを、いかて今まで註者等の心は著さりけん

同じ歌につき『古義』は「於可美爾言而」の註で、まず「於可美」に関する古事記上巻、神名帳、豊後風土記などの用例をあげて考証した後、『愚考』に対応する記事をのせている。即ち

(古義)乞ノ字、日本言とあるは写誤なることうつなければ、今改めつ乞言草書いとよく似て混ヒやすし、コヒテとよむべし、十三に、天地之神乎曹吾乞、十五に安米都知能可未乎許比都都安礼麻多武などあるは、その証と云べし、なお集中に、神に乞祈と云ることいと多かり、(言而とありては通えぬことなるを、註四いかでかも、今まで註者等の、心はつかざりけん)

これによれば、『愚考』はたまたま「難波人関谷敬藏深ニ見セニ遣ス所ノ控」ではあつたが、摘記の原拠となつたものが相当整つた形態で用意されており、註解作業の巻次の幅も「記聞」よりは一段とひろがり、しかもそれが完全な姿のまま「古義」の中に吸収されるようになって行つたように思う。

巻を異にした他の一例を挙げてみよう。

(愚考)剣太刀身爾取副常同四卷
三十二下

怪はシルシとよむへし、十七十四あらたしきとしのはしめに豊乃登之思流須登ならしゆきのふれるは、十九三十一いたしへよ先利之瑞シラシなど見えて前表の意なり、略解にサガとよめるはあたら

ず、
(古義)怪はシルシと訓べし、いはゆる前表の義なり、十九に、從古昔先利之瑞多婢末祢久申多麻比奴、この瑞をシルシとよめ

ると同じ、又十七に、新年乃波自米爾豐乃登之、思流須登奈良思
雪思敷礼流波、允恭天皇ノ紀ノ歌に、和鐵勢故鐵句倍枳予臂奈
利佐礎鐵泥能、区茂能於虛奈比虛予比辞流辞毛、統紀九ノ卷詔
に、大瑞物頭來理云々、今將嗣坐御世名乎記而、応來頭
來留物爾有良志止所念坐而云々、これらも、思流之てふ言の、
はたらきたるものにて同じ、(日本に、サトシと訓しはたがへ
り、又略解に、さがとよみたるは、甚しきひがことなり、さが
は、前表をいふことにはあらざるをや)書紀には怪ともあり、
とあつて、ここでは明らかに「略解」に対して批判を行った跡が認
められる。これは自説がすでに「愚考」と云える高さまでとどき、
次の「古義」が生まれる体制ができていたことを示すものである
う。

要するに「記聞」は、師である宮地仲枝説の聞書内容に補筆する
程度の気持から成っていることをその書名が語っているが、「愚考」
では、それから脱皮して、自説を展示しようとする意欲が動きはじ
めたのであろう。難波に遣わされた記事の原拠となったものは、恐
らく「記聞」と同程度の、語釈を中心とし、全巻に及ぶ摘要の形で
進んでいたと考えられる。

四 『万葉啓蒙』

(3) 『万葉啓蒙』

『記聞』から『愚考』へ発展した雅澄の註釈が、更に註解の度を深
め、第三の段階として生まれたものである。その成立の年時は詳か
でない。しかし『啓蒙』の書名で呼ばれた註釈が、『古義』の前段
階にあったことは確実である。その書名から見て、『愚考』で自説

の展示を企てた意図が、『啓蒙』により一層積極化したことが当然
考えられる。

宮内庁書陵部所蔵「鹿持雅澄蔵書目録」によれば、「麻ノ部」の
書目のうち、『万葉集古義』四十六冊、『同草稿』廿四冊になら
んで、

古義別本
万葉啓蒙 七冊

がある。もともと「古義」に先立って『万葉啓蒙』と呼ばれた七冊
の稿本があったが、七冊で筆を止め、間もなく『万葉集古義』の執
筆に転じたのであろう。その七冊というのは、高知飛鳥井玉衛旧蔵
本の中にある『蔵書目録』の麻ノ部にも

万葉集古義別本 二冊二ノ上下三冊一ノ上中下
一冊表題啓蒙ト有
一冊赤表紙一ノ上天

とあるように、内容が具体的にわかる。『啓蒙』と題したのは、嚴
密にいえばむしろ一冊のみで、他は全二十巻の巻初部分を扱っ
た、「古義」の別本と呼ばれるにふさわしい初稿奪本の類であった。
右の「蔵書目録」では、書目を見せ消ちにしてあるのは、「古義」の
内容に極めて近く、しかもそれとやや異なる別本のような内容、体
裁であったからである。

『万葉啓蒙』の稿本は現存しないので、その内容を考える手がかり
を今までは欠いていたが、南部殿男校本『万葉集』(宮内庁書陵部
蔵)巻一の書入れに記事の断片と思われるものが記入されているの
が明らかになった。同書六枚裏の目次と巻一本文とははさまれた余
白に、次のような注目すべき記事がある。

啓蒙ニ云○山跡乃国ハ今ノ大和国ヲサセリ尚本居氏ノ国号考ニ
詳シ考ヘ併スベシサテ夜麻登ノ名義未詳□□ノ山ノ謂モテ解□

説ハウケカタキヨシ有リ荒木田久老カ考ニ夜麻登ハ家庭処ノ略
 転ナルベシトイヘリシハ当レリヤ当ラズヤ尚彼説ニハ論アリ伊
 与人田内秀真カ説に饒速日命天ヨリ見サケマシテ倭洲ニ降坐シ
 ヨリ虚見津夜麻登國トイヘルヨシ書紀ニ見エタリカカレバ此ノ
 命ノ倭洲ニ降り宮造シロシメシ賜フ故ニ虚見津屋見立國トイフ
 意ニテコノ倭テフ名ハ起レルナルベシサテハ倭ハ屋見立ナリカ
 クイフ故ハ古事記ニ天ノミハシラヲ見立八尋殿ヲ見立トアリ凡
 テ尊キ神ノシロシメスヲ見トモ立トモイヘリ此の説シバラク拠
 アリテオホユトアリ

右の校本は、早くから雅澄に師事して、その研究業績に有力な補
 佐の役を勤めた南部殿男の手になるものである。恐らく雅澄の万葉
 註解の仕事が、『啓蒙』を経て更に本格化するためには、一層徹底
 した、校異作業が必要な段階に来ていたので、その要請にこたえる
 ためのものであろう。殿男は、まず巻一の万葉集本文を謄写し、そ
 れに校異を加え、その結果を雅澄の参考に供した上、筆者みずから
 座右に置いて興味ある事項を書入れて行ったものと思われる。最初
 の仕事である万葉本文の謄写が終った日次については何らの記録も
 ないが、最も重要な、諸本の比較作業に関する最初の仕事は、巻一
 につき、宮地氏校本を文化十四年丁丑五月十五日に終了している識
 語が巻末に見えるので、本文の謄写は少くともそれ以前である。又
 殿男の手によつて、『啓蒙』原典からの重要な引用記事が書入れら
 れたのも、恐らく本文謄写の直後と考えられる。なぜなら、啓蒙の
 書名を廃して、『万葉集古義』と銘打つ註釈が新しく生れた最初の徴
 証は、先きにも記したように、(巻二上にはあるが)文化十五年
 (文政元年)八月に書写を終っている事実(高知乙本)があるから

である。書入れの原拠になった『啓蒙』そのものの成立時期も、又
 文化十二、三年頃であつたと思われる。下つて文政六年八月には
 『万葉集古義』巻二上に再考を施せる程、『古義』の仕事が進捗し
 ていた(高知甲本)。

右に引用した『啓蒙』の断片には、すでに宣長、久老の所説が見
 え、又語釈に重点をおく方式を選んでゐる点など、内容はさきの
 『記聞』『愚考』の形式をまず襲いながら、しかもこれを一層詳密
 にし、前二著よりも更に『古義』へ近づいた観がある、今右と重複
 する部分を『古義』の巻一と比較検討してみよう。

(古義)○山跡乃國は、今の畿内大和ノ國をさせり、本居氏ノ國
 号考に詳しくいへるを考フべし、大和ノ國をしろしめすよし詔
 ひて、おのづから天ノ下を所治すことにわたりてきこゆるな
 り、さて夜麻登の名ノ義未詳、(すべて山の謂もて解たる説は
 うけがたきよし有り、荒木田久老考に、夜麻登は家庭処の略転
 なるべし、といへりしは当れや当らずや、なほ彼説には謂べき
 ことあり、伊与人田内秀真が説に、饒速日ノ命倭ノ洲に降り、
 宮造しろしめし賜ふ故に、虚見津屋見立國といふ意にて、この
 倭てふ名は起れるなるべし、さては倭は屋見立なり、かくいふ
 故は、古事記に天のみはしらを見立八尋殿を見立とあり、凡て
 尊キ神のしろしめすを、見とも立ともいへりと久老いへり、此
 の説しばらく拠ありげにはおほゆ)

ここでは『啓蒙』説の叙述を詳密にするための整理が多少添加され
 ているだけで、殆んど『啓蒙』原態のままが、『古義』註解の本文
 に活用されている。

『啓蒙』は、こうしてその前身である『愚考』(仮称)の成立した

文化十一年以後、間もなく筆をとり、恐らくは文化十二、三年の頃、雅澄の万葉集註釈の代表著作として扱われるだけの整った形態をなしていたものと思う。その体裁も『古義』に極めて似ていたのは明らかである。

五 『啓蒙』から『古義』へ

だが『啓蒙』から『古義』へその註釈が推移して行ったのは、単なる量の発展でなく、研究体系の上で重大な進展であった。

この場合書名に使った『啓蒙』という用語は雅澄の初期の研究が土佐藩学即ち海南朱子学と深い交渉を持っていた点を考えさせるに十分な資料を提供している。朱子は、六経を学ぶ前に、まず「小学」「近思録」を学習すべきを主張し、且つ六経の中、易経に新しく義理、即ち道徳的な見解を添加した。その朱子学を藩学の宗とするに努力した山崎闇斎は、この学習態度をきびしく守り、朱子が易経について解釈を下した著述「易学本義」「易学啓蒙」を自分の手で編輯、刊行し、子弟の講習に資した。特に「易学啓蒙」三巻は、後の藩学教授役について人々も、闇斎に倣ってこれを第一の学習書と定めた事実がある。「万葉私考」の著者宮地春樹も、公式にこの書を藩校で講じた記録が、「宮地日記」に残っている。雅澄も幼童の頃、儒学を教授役の中村世潭から教えられた時、勿論この書を学習したものと思う。従ってこの書名が彼の初期の万葉注釈書に利用されるのもすこぶる自然である。

易経に関する朱子の新しい理解が雅澄の古典研究に結びつくのは、一見奇異の感があるが、易経の中に潜む義理、即ち道徳的要素を重視する朱子の立場と、土佐藩学の伝統の中に生まれた雅澄の万

葉集研究とは必ずしも背致しない。もともと土佐では、朱子学を奉ずる藩学中枢部の人々が、同時に国学の系統に掉さすのが大勢であり、谷真潮も宮地春樹も例外ではあり得なかつた。雅澄が「古義」以前に、朱子学の影響下に立って、「啓蒙」と名のつく註釈を作っても、「古義」の著作と決して矛盾しない。たしかに彼は、後の「古義」で立てた国学的体系の中で、官長に倣い、ことごとし「道」の主張を退け、飾らない、自然の「言霊の風雅」を慕った。しかし晩年になると、再び日本書紀を研究対象に選び、「皇朝学」を主張し、「道」を立てようとはじめる。この発展の事実は、初期の「万葉啓蒙」の中に、すでに晩年の生長の芽が出来ていたことを示すものである。

右のように考えて来ると、この書が、雅澄の研究生涯に占める意味としては、まず著者の古典啓蒙に対する強い願い、他方には儒学的教養を正面から否定しないという、国学的研究体系への未熟な態度を帰納できる。今この二点を総合してみると、『啓蒙』の成った初期の段階では、研究の対象を日本の古典に選んではいるが、なお藩学の伝統から十分抜け切っていない意識が働いていたと思われる。『啓蒙』は、著者が初期に受けた儒学素養を忠実に引き継ぎ、郷土の藩学の伝統からなお脱け出せずに低迷している状態を映しているものである。そういう意味で『啓蒙』は、却って『古義』の前身にふさわしい位置に立つものと思う。

さて雅澄は、儒学風の名目をしりぞけ、『古義』の名が示すような国学的研究体系へ切り換えようとしたが、その転換が行われはじめた理由については、色々に考えることができる。おそらくその主要なる契機は、著者がその頃、師の宮地仲枝を中心とする歌人グル

一に属し、歌をたしなみながら、周囲の人々の誘掖下で、古典研究に眞實に打ち込んで行った時身につけた意識そのものであったと思う。

雅澄の新しい研究活動は仲枝の父春樹がかつて師事した本居宣長への傾倒となつてあらわれ、文化十四年には、『山齋集』に見えるように「寄懐旧」という、宣長大人十七回忌追悼の難波出題に答えて、(この出詠は文化十一年に『愚考』を難波の美濃屋忠五郎に托して関敬蔵に送つた時の、あの鈴門との縁によるものである。)一首の長歌を詠み送るなど、この数年、国学的研究体系に通暁するためのひたむきな努力が積み重なつて来た。そこで『古義』は、語釈を主にした『啓蒙』までの諸説に、国字という新しい研究体系の骨組みを架設することによって、組織的で、より綜括的な『古義』註釈体系を組み立てようとしたものと思う。

『古義』の名義は、その後、著者が研究の最後の到達目標としてねらつた「上古のありかた」と同義の「古風古義」から由来していると考ええる。この思想は、後に著者が「古のてぶり」^{註九}、個有の「風体」^{註一〇}、無為のうちにおのずから備わる「すがた」^{註一一}と呼んだような、一種普遍的な気味にも生長を上げて行く。まず文化十年前後から三四年の間に、にわかに著者の胸中で活潑に動き始めた「古風古義」を慕う気持こそ、明らかに宣長の『古事記伝』にあらわれるこの種の思想体系へ彼の主著を誘導、発展させて行く原動力となつた。

六 結 び

『万葉集古義』の前身のうち、(1)『万葉集記聞』(2)『万葉集巻々愚考』(仮称) (3)『万葉啓蒙』は何れも『万葉集古義』と同様、雅澄

の筆になる。このうち『記聞』だけが巻一の中下にあたる部分を註した冊子本(竹柏園蔵)、又『愚考』は雅澄筆の『雜誌』第二十二冊(飛鳥井玉衛旧蔵)に見える全三十巻に亘る摘解記事(二十二条)で、現存しない『甲戌雜志』にこれと同じ形で収まっていたもの。『啓蒙』はかつてはたしかに所在したが今は門弟南部殿男校本『万葉集』(宮内庁書陵部蔵)の余白書入れに僅かに残る断片にすぎぬ。

以上のように雅澄自身の手になつた三箇の前身書は、凡そ(1)から順次成立して行つた。『記聞』はその名の通り、雅澄が宮地仲枝の講述に列した時の聞き書き内容を主体として出来たものと考えるのが自然である。即ち雅澄が後に示した万葉集註釈体系の大筋は、その最初の示唆を仲枝から受け、その時の影響の下に、決定的な方向を定められたといえる。その後一年にして、『愚考』が成立した。その名の示すように、聞書から多少なりと愚考を示したいとする若い筆者の見識が頭をもたげはじめたことを物語る。摘解ではあるが二十二条に亘る全巻の語釈が主体的に試みられており、当時彼の手で運んでいた作業は現存の『愚考』より量において、もっと厚みのあるものであつたと思う。端念に用例を掲げて要語の詳解を試みる方法は、そのまま後の『古義』に受けつがれている。又『啓蒙』は恐らく『愚考』執筆の後、この集の一般的な普及を心がけ、殊に朱子の啓蒙書にならつて、童蒙をも啓蒙する著作を企画して生れたものと思う。著者は晩年、日本古典の啓蒙運動に対して藩自身が手をつける必要を力説し、その旨を上申したが、万葉集に関する限りは自分の手でその仕事がすでに完了していたと解していたのであろう。雅澄は右の具申書(「存寄書」)の中で民間の学をすすめ、たとえ草

蒙の児童なりとも藩の手により陶冶すべき旨を公にしている。^{註二}『啓蒙』という書名を著者が掲げた時の意図は、後に『古義』となつて見事に結実した。『啓蒙』は時間的にも『古義』に最も接近しているだけに、その意図を發展するため、た易く自己を解消してはばからなかった。

『啓蒙』の成立と殆んど並行して、文化十三、四年頃『啓蒙』から『古義』が脱皮するために必要な校異作業拡充の基礎が南部殿男の手で『校本』の形をとつた。その成果も『古義』の中に余さず採取され、それが実証的に組織されるための基礎作りに貢献した。かくして『万葉集古義』と名のつく註釈が真の意味で完成したことを告げる『万葉集古義総考』の誕生(天保六年、四五才)をさかのぼるすでに二十年前に『記聞』の出發が試みられていた。そして『愚考』『啓蒙』を受けて『古義』へとその作業が新しく轉換したところ、彼の研究生活にとり実は重大な転生であつた筈である。

雅澄の研究生涯にとり、大きな転機がいくつかある。そのうち最も著しいのは右に掲げた『記聞』『愚考』『啓蒙』と続く一聯の註解作業から、特に文化末年に動きはじめた「古義」への転生である。

それは晩年に認められる弘化三年の『訂正日本書紀』の成立、及び同年の『存寄書』による意見具申の試みと互に呼応する重大な転期である。前者は文化十三年、教授館字字生に、後者は弘化三年、白札格に昇格したという、いずれも身分上の変化が転機の素因となっている。この稿で主として述べた『記聞』『愚考』『啓蒙』の註釈作業は、いずれも『古義』の前身であるというだけでなく、彼の研究があくまで次の『古義』へと転生する準備期であり、新しい『古義』に對置される性格のものである。同時に晩年に見られる『古

義』を通り抜けた、それ以後の研究の母胎にもなっている。

註一 『鹿持雅澄遺稿』(高知大学文理学部編) 第一三—四頁

註二 万葉集古義一(国書刊行会本) 第二二—三頁

註三 「鹿持雅澄雜考」(高知大学学術研究報告第五号第二四

号)

註四 万葉集古義一(同右) 第三九七頁

註五 万葉集古義二(同右) 第四九—頁

註六 万葉集古義一(同右) 第一七頁

註七 万葉集古義六(同右) 第二八九頁

註八 万葉集古義六(同右) 第二九〇頁

註九 『永言格』上(万葉集古義附卷) 総論五枚オモテ

註十 『舒言三転例』(同右) 八オモテ

註十一 右二項(註九)に同じ

註十二 拙著『鹿持雅澄と万葉学』第三四五頁